

「歎異抄の世界と現代」 (3)

－ 第2章 (その1) 往生浄土の要 －

松田 正典

○ 第二章の構成

- 第1段「おのおの^{じゅうよかこく}十余ヶ国のさかいをこえて、云々」 ……^{なんご かしゃく}軟語と呵責
- 第2段「親鸞^{みだ}におきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、云々」 ……^{にしゆ じんしん}二種の深心
- 第3段「弥陀^{ほんがん}の本願まことにおわしまさば、釈尊^{きよこん}の説教、虚言なるべからず、云々」 ……^{しんによほっしょうろん}真如法性論
- 第4段「詮^{くしん しんじん}ずるところ愚身の信心におきてはかくのごとし、云々」 ……^{にそんきょう}二尊教

今回は、前2段についてお話しする。

第1段:「おのおの十余ヶ国のさかいをこえて、身命をかえりみずして、たずねきたらしめたまう御ころごし、ひとえに往生極樂のみちをといきかんがためなり。しかるに、念仏よりほかに往生のみちをも存知し、また法文等をもしりたるらんところにくおぼしめしておわしましてはんべらんは、おおきなるあやまりなり。もししからば、南都北嶺にも、ゆゆしき学生たち、おおく座せられてそうろうなれば、かのひとびとにもあいたてまつりて、往生の要よくよくきかるべきなり。」

(語彙) 往生極樂のみち＝浄土往生に道。主体(人)の基体を成就する道。

しりたるらんところにくおぼしめす＝知りたいと強く欲する

南都北嶺＝奈良の都と比叡山(興福寺と延暦寺) ゆゆしき学生＝優れた学僧

1. 関東の弟子達の間起こった混乱とその現代的意味

○京都の親鸞聖人を訪ねた関東の弟子達を、驚くほど丁重な労いの言葉で迎えておられる

: 真摯な求道心へのねぎらい—^{ひつきょうなんご}畢竟軟語

○関東に起こった事件

- ①^{ぞうあくむげ ふうぎ}造悪無碍の風儀による逮捕者 ②^{ぜんらん}善鸞(親鸞聖人の息子)による念仏の否定(^{けんぜんしゅうじん}賢善精進の主張)

○事件の根にあるもの(藤秀璣選集第2・3巻『歎異抄講讃』法蔵館)

- ① 観念派の異義 ② 賢善派の異義

○異義の現代的意味 (松田正典『生きるための歎異抄』法蔵館)

- ① ニヒリズムの問題現象の背景: 知性中心主義
② うつ病症候群の根にあるもの: 理性中心主義

○関東の弟子たちの迷いにたいする親鸞の^{ひつきょうかしゃく}畢竟呵責

2. 人間の实存としての悲劇: 生死の苦海を生きる

○親鸞聖人は、御晩年、悲劇(善鸞の義絶)を縁として師・法然聖人の教えを頂きなおされた。このことを口伝する「聞書」が『歎異抄』である。生老病死の四苦を生きることには人間の实存としての悲劇がある。

○『^{かんむりようじゆきょう}観無量寿経』は、釈尊が王舎城の悲劇を縁として『^{だいむりようじゆきょう}大無量寿経』の教えが一切衆生救済の法として説かれる時と場を得て、弟子・阿難に「退代(かだい)に弘布流通(くふるづ)せよ」との使命を与えられた経。

○一切衆生の救済の法「^{ようもん}釈迦は要門ひらきつつ ^{じょうさんしよき}定散諸機をあわれみて

^{しょうぞうにぎょうほうべん}正雑二行方便し ^{せんじゆ}ひとえに専修すすめしむ」(親鸞『高僧和讃』善導大師)

【語彙】要門(ようもん)＝必ずくぐる要の門。定善(じょうぜん)：息慮凝心と散善(さんぜん)：廃悪修善の教え。諸機＝もろもろの機類(人)。正雑二行(しょうぞうにぎょう)＝正しい行と雑多な行。方便(ほうべん)＝小さなものへの大いなる世界の働き。専修(せんじゆ)＝称名念仏。弘願門(くがんもん)：大いなる願いの世界。

第2段(1)：「親鸞におきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひとのおおせをかぶりて、信ずるほかに別の子細なきなり。」

1. よきひと＝善知識(ぜんちしき)

人の一生は、帰命の大地を求めての旅である。乳児の大地は母であり(母性アイデンティティ)、幼児の大地は両親であり(両親アイデンティティ)、学童期においては友(集団アイデンティティ)であり、青年期に至って生涯の師との出遇いにおいて自灯明(自己アイデンティティ)を遂げる。

住岡夜晃師は「道を求めることのない人生はそのまま死んでいる」(『讚嘆の詩』樹心社)という。そのような求道とはいったい何か。それは具体的には師を求める旅である。人の一生は、師を求める旅と申してよい。

仏道における師を、善知識(ぜんちしき)という。仏道とは人間成就の道であり、これを平生業成(へいぜいごうじょう)という。悠久の歴史を今に生かしめられ、人間成就の旅を久遠の大道として生きるのが仏道である。入信したり、特別な約束を要するようなものでない。一瞬の人生を、本願酬報(ほんがんしゅうほう)の歴史として生きるという、それが「大乘の中の至極(しごく)」(親鸞書簡集『末灯抄』)の仏道である。

○『^{ねほん}涅槃経』に言わく「つねに三種の^{ぜんちようご}善調御をもつ。一つには畢竟軟語、二つには畢竟呵責、三つには軟語呵責なり。この義をもつてのゆえに、菩薩・諸仏はすなはちこれ真実の善知識なり。」

2. 真の朋友

仏道における師を師主善知識(ししゆぜんちしき)という。さらに同行善知識、外護(げご)善知識が説かれる。師主とは、教え導いてくださる人。同行とは道の同行者。外護とは道の外から護る人々。

清澤満之師は、『真の朋友』と題された文章の中で次のように語られている。

「真の朋友は、宗教的根拠に立ち、絶対無限を信憑して、常に満足の心に住し、いわゆる天をも怨まず、人にも求めず、独立独行、決して外物他人のために心を動かさず、常に如来の大命に随順して、自家の本分を尽くすをもって第一義とす。」(寺川俊昭『清澤満之論』文栄堂、安富信也篇『清沢満之集』岩波文庫)

3. 出遇い

では、そのような善知識にどのようにしてお遇いできるのでしょうか。父母や善き友の勧めによって師に遇う。これを宿善開発(しゆくぜんかいほつ)という。宿善開発して遇えた師主善知識は、一人の沙門として自ら仏道を歩む方。人の一生の意義は、ただ仏道にお遇いすることにあることを身をもって証す方であった。そのような出遇いが我が身の上に成就してみると、それは、大海原をただよっていた椰子の実が、たまたま小さな島にたどり着くような出遇いであった。「会うた」のではない。「会う」は約束してあう。「遇う」はたまたまあう。たまたまたどり着き得たとしかいいようのない感動。喩えれば、大海原を流転する椰子の実が大地を得て、一本の椰子の木として成長を遂げる。この大千応感動を値遇という。「よきひと」に遇うことが、仏道成就の鍵だとされる。

『曠劫多生のあいだにも 出離の強縁しらざりき』

本師源空いまさずば このたびむなしくすぎなまし』(親鸞『高僧和讃』源空聖人より)

本願のいのちを今生に賜り、悠久の歴史を今に生きる身となる、ここにのみ生死大海の浮生の身に尊嚴の真実成就がある。この量り無い破闇のはたらきに値い、辺り無い生命の包摂に遇い得る鍵は、師主善知識に遇うということ。ただこれに依って、親子も夫婦も兄弟も同行善知識となり、この世でお遭いする全ての縁に外護善知識としての意義が賦与される。

○『涅槃経』に言わく「一切梵行の因は善知識なり、一切梵行の因無量なりと雖も善知識を説けば則ち已に撰尽しぬ」(親鸞『顕浄土真実教行証文類』化土巻引文)

○『華嚴経』に言わく「汝、善知識を念ぜよ、我を生ずること父母の如し、我を養うこと乳母の如し、菩提分を増長す。医の衆疾を療するが如し、天の甘露を濯ぐが如し、日の正道を示すが如し、月の浄輪を転ずるが如しと。(親鸞『顕浄土真実教行証文類』化土巻引文)

(註) 梵行(ぼんぎょう)＝清浄の行。世間を出ずる道、正道の歩み。 菩提分(ぼだいぶん)＝菩提(仏の正覚)を得る実践法。

4. 念仏

「念仏」は、仏の徳を憶念する行として伝えられた永い歴史をもち、浄土教に限定されたものではない。称名念仏(仏の名を口に称える)、観像念仏(仏の像形を観ずる)、観相念仏(仏の相貌を観ずる)、実相念仏(仏の理法を観ずる)など、煩惱を滅して涅槃を覚る修善の方法が念仏であった。

しかるに、浄土教における「念仏」とは、七高僧第一祖、龍樹大士の信方便の易行—「もし人とく不退転地に至らんと欲わば応に恭敬の心を以て執持して名号を称すべし」に始まる。ここにおいて名号とは阿弥陀仏の本願の名号である。「南無阿弥陀仏」は、本願の名告り、大いなるものの一切衆生救済の名告りである。「絶対なるものの自己限定」(三木清)である。

南無とは、サンスクリット語の namo ナモの音写であり、意識すれば帰命。阿弥陀とは、Amita アミタの音写で、量り無いの義。現代インドでもアミタという言葉が、感嘆詞として用いられる。親鸞聖人は、「帰命尽十方無碍光如来」と意識されている。お念仏を申すということは、阿弥陀仏の本願の名告りに応答する身となるこ

とであり、それは即ち帰命の大地を得る身となったということ。

「ただ」とは、このこと一つ、他に並び無い、無二を顕わす。また、何かの為にとか、何かを祈願してとか、そうした不純さが混入し得ない、純一無雑を顕わす。

第2段(2):『念仏はまことに浄土にむまるるたねにてやはんべらん、また地獄におつる業にてやはんべらん総じてもて存知せざるなり(乃至)いづれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし』

1. 「自力のころ」

御晩年の聖人は、「自力のころ」とは「みづからが身をよしと思う」、「身をたのむ」、「身を賢く顧みる」、「ひとをよしあしと思う」心だと定義しておられる。(親鸞『唯信抄文意』)

○人間生成の揺りかごととしての「自力の心」

自らが身を善しと思う心(善人意識)と自らが身を頼む心(自己過信)とは、子供の成長にとり欠かせぬものである。反省(身を顧みる心)も批判力(善し悪しの分別)も子供の成長にとって同様に大事なこと。

2. 「自力のころ」を超える

「自力の心」は、喩えれば「卵」の殻である。卵の殻は卵の命を護る。しかし、ある時期から、卵の命が雛となってゆく成長を阻害するところとなる。これを「自力のはからい」という。善人意識と自己過信で自他を裁き、被害者意識に陥り、責任転嫁となる。反省というよりも被害者意識、正しい批判というよりも責任転嫁の言動が目立つ未成人間が増えてくると、その民族の深い精神文化が失われつつあるというべき。

第2段の結び:『いづれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし。弥陀の本願まことにおわしまさば……』(二種深心)

1. 釈尊の説かれる「業」と「行」

行為を「業」という。普通、行為とは身の行いのことである。しかし、釈尊は、人間の行為を身・口・意の三業をもって説かれる。殺生、邪淫、偷盗を身業の悪(自他を損なう行為)、悪口、両舌、綺語、妄語を口業の悪(自他を損なう言葉)、貪欲、瞋恚、愚痴を意業の悪(自他を損なうころ)、併せて十悪業という。十悪を為さざるを、十善業という。

仏教における善とは生命の尊厳を守り育む行為である。そして、悪とは生命の尊厳の破壊行為をいう。あらゆる悪の根に自己疎外がある。この意業の悪が根本にあるから、貪・瞋・痴を三毒といい、根本煩惱という。痴は仏智疑惑、すなわち大いなる世界に暗いこと。根本煩惱を因として生命界は生死の苦海を展開する。

増谷文雄氏は、「対他的に人間関係の問題」として「人はなにをなすべきか、なにをしてはならぬか」という問いに答えるのが倫理学の課題であり、「対自的に自己の人間形成の問題」として「業」を問うのが仏教独自のアプローチだと指摘されている。そして「仏教の業を説くことは、はなはだ広く深く、かつ精細であって、そ

の業説はまさに仏教独特のものであるというに相応しい。思うにそれはブッダ・ゴータマの正覚によってなれる縁起・無常・無我ないし因果などの思想的基盤があって、はじめて、かくも広く、深く、かつ精細な業思想の展開を可能ならしめたものと考えられる」といわれる。(『業と宿業』講談社現代新書) 釈尊は、身・口・意の三業を説かれ、中でも意業に重きをおかれることが、次の『法句経』の第一句と第二句より窺われる。(増谷文雄訳)

「諸法は意によりて導かれ、意を主とし、意によりて成る。人もし穢^{けが}れたる意をもって、あるいは語り、あるいは行なわば、苦しみの彼に随うであろうこと、あたかも、車輪^{けんじゆう}の牽^{けん}獸^{じゆ}の足にしたがうがごとし。」

「諸法は意によりて導かれ、意を主とし、意によりて成る。人もし浄^{きよ}き意^{こころ}をもって、あるいは語り、あるいは行なわば、楽しみ^{たのしみ}の彼に随うであろうこと、あたかも、影の形にしたがいて離れざるがごとし。」

「地獄は一定すみか」とは、如来本願のはたらきに値遇を得ながら貪欲・瞋恚・愚痴(意業の悪)に終始する「仏智疑惑」の自覚のことばである。如来無視の我との自覚であり、「弥陀の本願まことにおわします」との底^{そこ}莫^{ばく}の大^{だい}悲^ひの覚^{かく}知^ちと二種^{いちじゆ}にして一具^{いちぐ}の心である。ここに西田哲学「絶対矛盾的自己同一」の由来があろう。

行(ぎょう)とは、十善業に励む仏道の修行(戒・定・慧)を指すが、『大無量寿経』では阿弥陀仏の本願の用を指す。(註)法然聖人は戒・定・慧の三学至道の聖と讃えられたが、自らは「愚痴の法然房」と述懐された。

2. 善導大師の「二種の深信」

「深信といふは、即ちこれ深信の心なり。また二種あり。一つには、決定して深く、自身は現にこれ罪惡生死の凡夫、曠劫よりこのかたつねに没し、つねに流轉して、出離の縁あることなしと信ず。二つには、決定して深く、かの阿弥陀仏の四十八願は衆生を摂受して、疑なく慮りなくかの願力に乗じて、さだめて往生を得と信ず。」(註)善導は唐代の僧(613—681)。この文は『観無量寿経』の解釈書の一文。前が機の深信、後が法の深信。

3. 親鸞聖人の表現

「地獄^{いちじゆ}は一定すみかぞかし。弥陀^{みだ}の本願^{ほんがん}まことにぞおわします。」(歎異抄第2章)

「弥陀^{ごころ}の五劫^{しゆい}思惟^{しゆい}の願をよくよく案ずればひとえに親鸞^{いちにん}一人がためなりけり。さればそくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ。」(『歎異抄』後序)

「そくばく」とは「底莫」である。したがって「底莫の業」は「宿業」をさす。細川巖先生は、宿業とは現実であると頂かれた。(細川巖『晩年の親鸞』法蔵館)

われらの現実とは、いかなるものか。それは、まさしく聖人の仰せの「自力のこころ」である。自らが身をよしと思うこころ(善人意識)、身をたのむこころ(自己過信)、身を賢しく顧みるこころ(自己卑下)、ひとを善し悪しと思うこころ(自己中心)である。貪欲・瞋恚・愚痴の三悪趣の心根が、自力のこころ。自力のこころが私の日暮らしてあり、如来無視の現実。これを「定散の機」といい、この深い闇に一条の仏智の光明がとどくときこの無明の黒闇がはらわれて三悪道を厭離し浄土(報土)往生を願う行人が誕生する。そして、遂に宿業の自覚者となる。ここにおいて、五濁悪世の穢土(娑婆)は、如来応化の世界、化身土として見出されてくる。如来無視の現実の懺悔(梵語サンゲ)は、如来応化の場としての現実の発見である。如来は、真仏土(無量光明土)の功德を化身土に廻施したまう。ここに、「宿命を転じて使命となす」世界が成就するのである。善導大師の二種一具の深信は、親鸞聖人にいたって二種一具の世界観(真仏土・化身土)となったのである。

(本稿は、平成24年9月18日にTSS文化大学で行った講演の概要である。)